

2001年のスタート記念の地を、私は「大手町」に決めた。東京、箱根間大学駅伝競争。往路の「C旋風」の余波で、ゴール地点は例年以上に沸き返っていた。

私は小学生の時から箱根駅伝が大好きだった。白地のシャツに、真っ赤な「C」マーク。紅白の縁起物を着ているようなチームを応援しているうちに、いつの間にか、そのチームの「中央大学」に入学していた。

しかも、中大は箱根だけではなかった。実に多くの卒業生が自分の目標に向かって活躍している。さらに大学に対する期待の大きさ。中大は本当に、さまざまな顔を持っていた。そんなことを実感させたのが「学生記者」としての活動だった。

箱根駅伝ファン 心にもCマーク

法学部

船橋 智



学生記者は私にCマークに対する憧れを増幅させてくれた。なんとなく大学に入り、何となく卒業していく学生が多い中で、学生記者は一つの枠にとられない行動力というものを与えてくれた。「学生記者を経験してよかった」と、つくづく思う。

その行動力が私を市民ランナーに駆り立てた。箱根への憧れ、Cマークへの憧れが私のような平凡な学生の心を動かしたようだ。もちろん、所属チームは「中大学生記者クラブ」。ユニフォームには小さなCマークが輝いているのだ。

「頑張れ中大学生記者！」—こんな声援が、いまも耳にこびりついている。こういう思いに浸れたのも、教職員、学生記者のOB、先輩、後輩みなさんのご厚意があつてこそです。本当にありがとございました。

学生記者の目

学生記者になると、「中央大学」がとてもよく分かります。お蔭様で大学の晴れやかな舞台を、さまざまな角度から見せていただき、誌上で報告させていただきました。

学長のご意見を目の前でお聞きすることが出来ましたし、フランス大使やスロバキア大使から直接お話を伺ったときは、中央大学の国際的な顔を実感する良い機会でもありました。また、入学式や卒業式の取材の時には、初めて中大キャンパスに入った新生やご両親の感想をいっぱい伺いました。また、中大水泳部の皆さんがシドニー五輪で大活躍する前年、大学内で猛練習を繰り返している最中にお邪魔し、選手やコーチの気持ちを、ナマで聞くことも出来ました。『Hakumon ちゆ

中大をさまざま な角度から学ぶ

商学部

白瀧ちるみ



うおう』に登場する学生のさまざまな経験談を聞く時、「みんな、とても輝いているな」と思いました。

32^キを歩き通す恒例のウォーキングラリーにも、学生記者として参加しました。沿道の鳥や花が私たちを歓迎してくれます。美しい自然に囲まれたコースをひたすら歩き、クタクタ状態のゴール付近で白い校舎を見上げた時の、あの感激はいまも忘れません。地元の方との語らいの中から、地域に開けた中央大学を実感しました。

社会に出ましたら、大学で身につけた「プラス・アルファ」を大いに活かして、一回りも二回りも大きな人間になろうと、心掛けております。広報課の方々から、その都度、適切なご指導をいただいたこと、お一人一人の言葉が私を支えてくださったことを感謝いたします。